〔資料紹介〕

茨城県陸平貝塚発見の縄文土器

庄　司　　克

はじめに

昭和38年春、筆者は茨城県美浦村に所在する陸平貝塚を踏査中、その西端の斜面貝層部に縄文中期の貝層が露出しているのを発見した（第1図×印）。当時、この斜面一帯は山林で、台地上は畑地となっていた。表面的観察によれば、この付近における貝層分布の主体は斜面部であり、台地上の縁辺部においては、多少の貝の散布をみるだけであった。

山林内に入ってみると、この貝層ブロックの中央部分に当る斜面部には、傾斜が急なためか、ところどころに垂直に近い段差のついた部分や、土砂崩れで抉れたような箇所が有り、ここに大型のハマグリなどから成るプライマリーな貝層が縄文土器と一緒に顔を出していた。筆者はこの断面より阿玉台式の復原可能土器を2点採集したのをはじめ、ここより北へ約20m程離れた斜面途中の凹地（第1図○印）の断面より堀之内Ⅰ式の復原可能土器数点を採集した。

本資料は正式な調査によるものではないが、陸平貝塚発見の数少ない資料として一日も早く公開すべきであると考え、ここに紹介する次第である。

この小報が研究者諸兄の一資料になれば筆者の幸とするところである。

Ⅰ　遺物発見時の状況

陸平貝塚は今さら紹介するまでもなく、明治16年、佐々木忠次郎・飯島魁氏の発掘調査により（註1）縄文中期土器の異名とまで言われた「陸平式土器」の標式遺跡としても著名である。この陸平式土器の名は昭和23年・東京大学人類学教室の発掘調査（註2）により、その性格が明らかにされると同時に消滅してしまったが、縄文時代の編年学史上、ユニークな存在となっている。

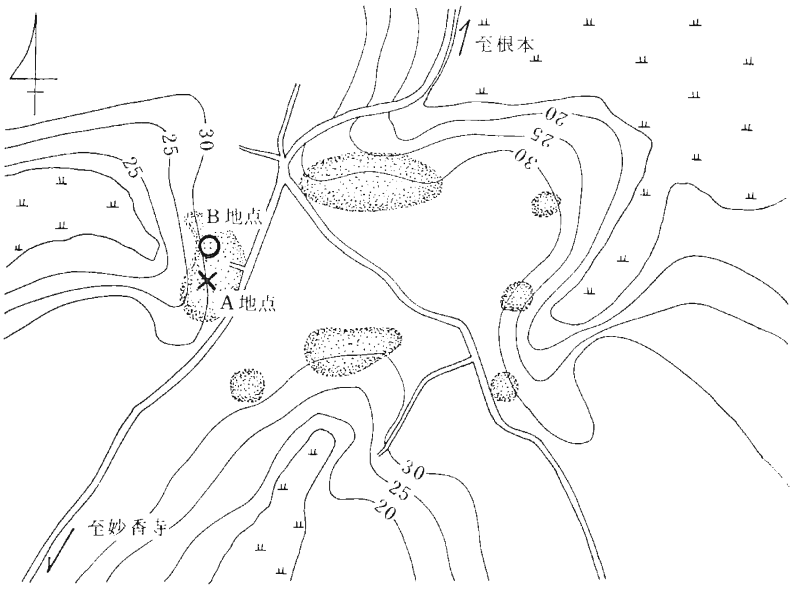
その後、昭和43年に茨城県史編纂事業の一環として、明治大学考古学研究室の手により、初めて遺跡全体の地形測量が行なわれ、その全貌が明らかになった。これにより本遺跡は、通称「陸平台地」と呼ばれる独立丘陵の中央部に位置し、平担な台地の縁辺に東西300m、南北150mの範囲に点在する大小7個の貝塚から成ることが判明したのである。

遺物の発見地点は第1図に示すとおり、点在する7箇所の貝塚群のうちの1つで、その位置はちょうど陸平貝塚の中央部に向かって西側から進入する小支谷・谷頭最奥部の東側にある急斜面区域一帯である。このすぐ東側の台地上縁辺には、約1Km程ど南方の台地麓にある妙香寺より北上して、この台地を縦断し三浦村根本へと抜ける巾約3mほどの農道が通っている。踏査当時、この農道附近には千葉県下の遺跡では想像も出来ないほどの阿玉台式土器の大型破片が散乱し、あるいは無造作に投げ捨てたようにころがっていた。

しかし、農道の右側に広がる台地上の畑地にはさほど大型の破片は見当らず、左側の山林内にもこの農道付近では特筆すべき遺物の散布はみられなかった。ところがここより10mほど奥へ入った山林内の斜面部には、ハマグリ、カガミガイなどを主体とする、かなり良好な貝層が数箇所に亘って露出していたのである。なおここではとりあえず、阿玉台式土器発見地点（第1図×印）をA地点、堀之内Ⅰ式土器発見地点（第1図○印）をB地点と呼ぶこととし、次に両地点の立地・層序の概略を記する。

Ⅱ　遺物発見地点の概況

A地点およびB地点は、前述の如く妙香寺から三浦村根本へと抜ける農道に沿って南一北に延びる台地斜面部にあるが、両者の間には2～3mの比高差がある。第1図のとおり、B地点の方がA



第1図　茨城県陸平貝塚の周辺地形見取図
（縮尺　約2千分の1）

東西南北、四方向から進入する支谷の谷頭に囲まれた平担な台上の縁辺部に、大・小七個の貝塚が点在している。

地点より位置的に高く、台地縁辺の肩部に相当する。このためか、A・B両地点は僅か20mの近距離にありながら、その内部の状況はまったく異なった様相を呈していた。

つまり、台地上平担部より3～4mほど低い斜面途中のA地点では、阿玉台式期の貝層は台地上から投げ捨てられた状態を示していたにすぎず、最下層にはロームはなく、灰白色の砂質粘土層が顔を出していた。しかし、B地点においては上部層こそ多少の攪乱を受けていたものの最下層からハードロームを掘り込んだ堀之内Ⅰ式期の竪穴住居址の一部が出現し、その床面上には堀之内Ⅰ式土器を大量に含む貝層群の堆積が認められた。このB地点における住居址の発見は、あくまで部分的なものであるが、現時点では貴重な発見であり、この陸平貝塚における住居址の展開が台地上平担部にあることを暗示させる。

次にA地点・B地点における堆積層序とその所見を略述する。

＜A地点＞

Ⅰ　層　（表土・攪乱層）

斜面上部からの流出土が主。地表面はかなり凹凸があり、阿玉台式土器・堀之内Ⅰ式土器の小片が散布している。

Ⅱ　層　（第1混土貝層）

部分的にⅠ層からの攪乱が喰い込んでいる。ハマグリを主体とし、カガミガイ、オキシジミ、シオフキ、アカニシなどの貝類から成り、有機質の黒色土を混入する。遺物は土器片が少量、時期は阿玉台式である。

Ⅲ　層　（第2混土貝層）

貝層を構成する貝の種類はⅡ層と同じであるが、粘土質の黒褐色土を含み、捨て灰と焼土ブロックを多量に混入する。本層中における貝殻の流れの方向は谷に向って一定した傾斜を保っており、明らかに台地上から谷へ向って貝殻を投げ捨てた状況を呈している。

本層中における遺物は多く、土器では復原可能な耳状把手付深鉢形土器（第3図2）が含まれていた。その他にマダイ、クロダイなどの魚骨や、シカ、イノシシなどの獣骨がみられたが、これらは特に灰や焼土中から多く発見された。

Ⅳ　層　（ハマグリ純貝層）

大型のハマグリを主体とし、カガミガイ、オキシジミ、アカニシ、アサリ、マテガイ、を混入する。部分的にマテガイのブロックがある。捨て灰の混入も認められるが骨類はほとんどない。土器片の包含はさほど多くないが、ほぼ完形の深鉢形土器（第3図1）が斜面上部より転がり落ちたような状態で倒立して断面にかかっていたのをはじめ大型のものが目立った。時期は阿玉台式である。

Ⅴ　層　（暗褐色土層）

粘質の強い、かたくしまった土層である。本層中発見の遺物は少なく土器片が少量出土したのみであるが、この出土土器によって本層は上・下に

二分される。

まず本層上部より断面三角形の施文具による結節沈線文を有する阿玉台式土器片が、そして本層下部～地山上面にかけては極く少量であるが縄文早期の鵜ケ島台式土器が出土している。

VI 層 （砂質粘土層）

地山の灰白色を呈する砂質粘土層である。以下は未確認。

＜B地点＞

I 層 （表土・攪乱層）

A地点同様に地表面はかなり凹凸があり、破砕された貝殻が散乱している。

II 層 （第1混貝土層）

有機質を含む黒色土中にハマグリ、カガミガイ、シオフキなどが少量混入している。部分的に層が乱れており、攪乱の恐れがある。阿玉台式と堀之内I式の土器片が少量ずつ混在している。

III 層 （混土貝層）

ハマグリ主体の混土貝層である。本層の上半部も一部攪乱を受けているが下半部はプライマリーな層堆積を示す。やはり阿玉台式土器と堀之内I式土器が混在する。

IV 層 （純貝層）

大型のハマグリを主体とする純貝層で、その他にカガミガイ、サルボウ、マガキ、シオフキ、アカニシ、イボニシ、ベンケイガイを含んでいる。遺物は土器片が少量で、堀之内I式のみである。獣・魚骨類などはほとんどみられなかった。

V 層 （第2混貝土層）

大型のハマグリ、カガミガイを主体とする混貝土層。捨て灰と思われる灰ブロックが混入しており、遺物類は多い。とくに本層下部に土器が集中して含まれており、完形および復原可能な堀之内I式土器が6点ほど、VI層の直上から発見された。

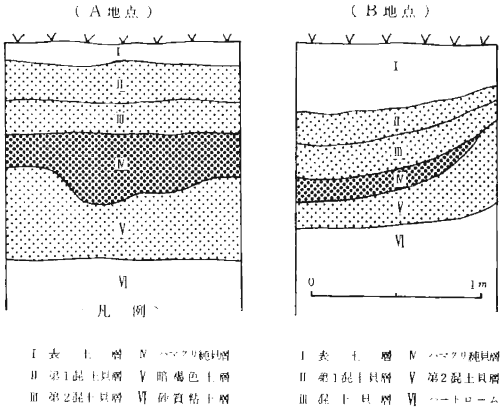
VI 層 （ハードローム層）

竪穴住居址の床面である。第2図の断面図のとおり、右側部分が立ち上がり始めており、壁に近いものと思われる。炉・柱穴などは未確認である。

III 発見遺物

1 A地点発見の土器

1（第3図1、第4図1）



第2図 A・B地点の層序

高さ37cm、口径30cmを計る深鉢形土器である。器形は口辺部が外反し、頸部でいちど段がつくが全体的には口の開いた朝顔状をしており、阿玉台式でも古手の深鉢形土器に近い形態を成す。口縁部には中央に抉入のある波状の突起が4箇所に付けられている。

この土器の文様は断面三角形の粘土紐が主体になっている。まず口辺部をめぐって、紐線による円状文が8箇所にあり、この紐線の内側には断面三角形の器具による結節沈線文がつけられている。この結節沈線文は口縁部だけでなく、胴部上半をめぐる紐線や、その直下にある懸垂状紐線の傍にも施されている。

このように結節沈線文の施文はあくまでも粘土紐に付随してつけられており、この土器に関する限りでは、結節沈線文自身は独立した文様として施されたのではなく、むしろ、粘土紐を器面に密着させるための意味あいが強い。この土器は口辺周辺の無文部分においては、成形後器面調整が行なわれている。しかし、胴部以下にはまったくその形跡はなく、輪積みの跡をそのまま残した粗雑なつくりである。この輪積み痕は頸部から底部にかけて十二段確認できる。

阿玉台式土器には、このように器形成形時の輪積みの跡をそのまま残したものが多いが、この土器はさらにこの上に連続する荒いキザミ目を加えている。このキザミ目は、お世辞にも文様と呼べるような代物ではなく、輪積みした粘土紐どうしを密着させるための圧痕ともいうべきものである。

しかし、その施文位置を良く観察すると、明らかにこのキザミ目列は輪積痕の一段おきに規則的に付けられており、やはり器面装飾を意図したものと考えざるを得ない。この輪積み痕とキザミ目列は、あくまで断面三角形の紐線文に付随するものであり、紐線文の地文的な色あいが強い。

次に器形成形時における粘土紐積み上げの一単位としてこの輪積み痕をみると、その間隔は約2cmで、頸部から底部までほぼ一定している。また、口縁部周辺の輪積み痕の明白でない部分では、器形の屈曲部分の単位巾は約2cmである。一般に器形成形時においては、底部より口縁部まで同じ太さの粘土紐を使用したと考えられる（註3）ので、本土器の器形成形にあたっては合計17本の粘土紐を積み上げたと推定できる。

本土器は阿玉台式土器でありながら、胎土中にはまったく雲母粒を混入せず、そのかわりに多量の砂が含まれている。また、この土器の内側は、外側の荒いつくりとは対象的に、てかてかに研磨されており、いかに容器としての内面処理が重要であったかを物語っている。

この土器の用途については、一応その形態から貯蔵用・煮沸用の二通りが考えられるが、炭化物の付着などという具体的な証拠がないためその決定は難しい。しかし、本土器の外側壁面をよく見ると、底部より10～15cm以上の胴下半部が火熱を受けたように赤褐色化しており、胴部上半から口縁部にかけては一面に黒色を呈している。加曽利貝塚博物館における複製土器の煮沸実験によれば、煮沸のため土器を火にかけた場合、器壁外面にこのような現象の起ることが確認されている（註4）。つまり、土器を煮沸具として使用した場合、火の直接あたる胴下半部は火力のため一率に赤褐色化し、その反面、煙のかかる胴上半部は炭素が付着して黒くすすけてしまうのである。おそらく、本土器は煮沸具として用いられたものであろう。

2（第3図2、第4図2）

高さ38cm、口径29cmを計る。形態はキャリパー形深鉢に近いが口縁部の外反の度合いは強く、頸部はいちど段がつくように大きくくびれており、胴部はほぼ円筒状を成す。口縁部の四箇所には外側に向って開いた耳状の把手がついており、これが外反気味の口辺部をさらに誇張する効果をあげている。

器面を飾る文様は、1同様に粘土紐の貼り付けによる紐線文が中心になっている。この紐線の断面は、1のような三角形ではなく丸味をもっており、これによって口辺部には楕円状文が施され、その周囲には三本の集合沈線による弧線文や波状文がつけられている。

一般に阿玉台式土器の紐線文の周辺には、1のように結節沈線文が施されており、その施文法はあたかも紐線を器面に密着させるべく深く、執ように押されている。ところが、この土器には結節沈線文の施文はまったくみられず、紐線周辺の文様は三本の沈線によって代用されており、その施文位置も紐線とは離れた場所にまで及んでいる。つまり、この三本の沈線は紐線を密着させる効果はほとんどないといってよい。そのかわり、この紐線の上面には半裁竹管の内側部分をあてがって押しつけ、紐線を器面に密着させようとした跡がある。このように、結節沈線文と沈線という器面の施文法の違いもさることながら、1と2の粘土紐貼り付けの技法差は歴然としている。

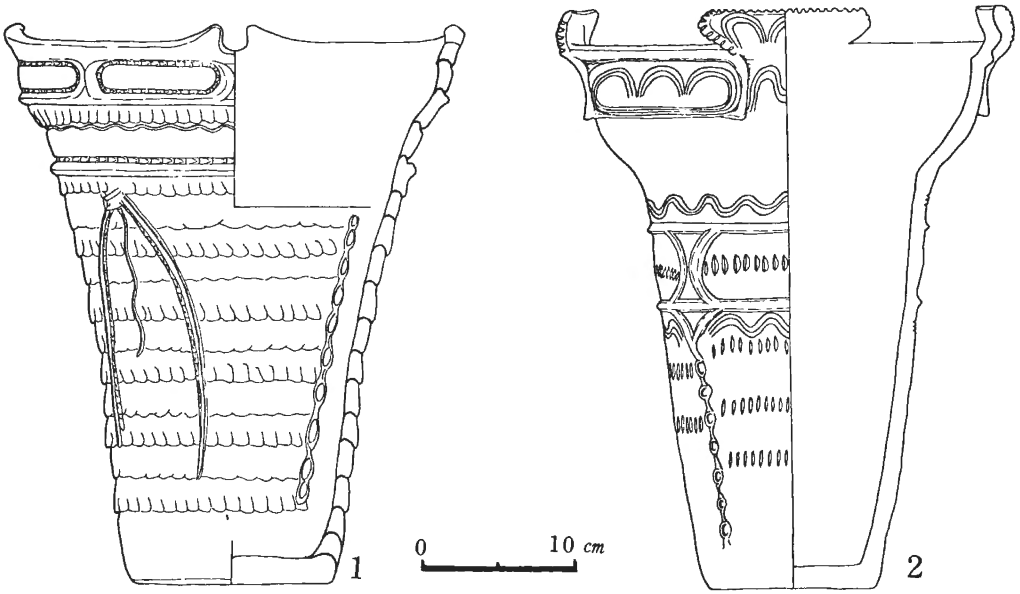
また、本土器の胴部には輪積み成形の際のキザミ痕を文様化したと思われる連続キザミ目文が上下に六列ある。この施文法は1とは異なり、明らかに器形成形後、念入りな器面調整を行った後に、キザミ目をつけ加えたものである。このため、この土器の成形時に要した粘土紐の数は判然としないが、耳状把手を除いて底部から口縁部までの高さは36cmあり、1とほぼ同規模で、器壁の厚さも近似している。おそらく、1と同程度の粘土紐を積み上げたものであろう。

本土器の用途については、煮沸具としての可能性が強い。器壁外面における胴下半部と上半部との色調の差は1よりもさらに明確で、底部より20cmの位置にある横方向の粘土紐を境にして、まるで線をひいたような明確な差をみせている。当博物館の実験結果によれば、このような現象は土器製作の焼成時にはまったく発生しないことが確認されている。

2　B地点発見の土器

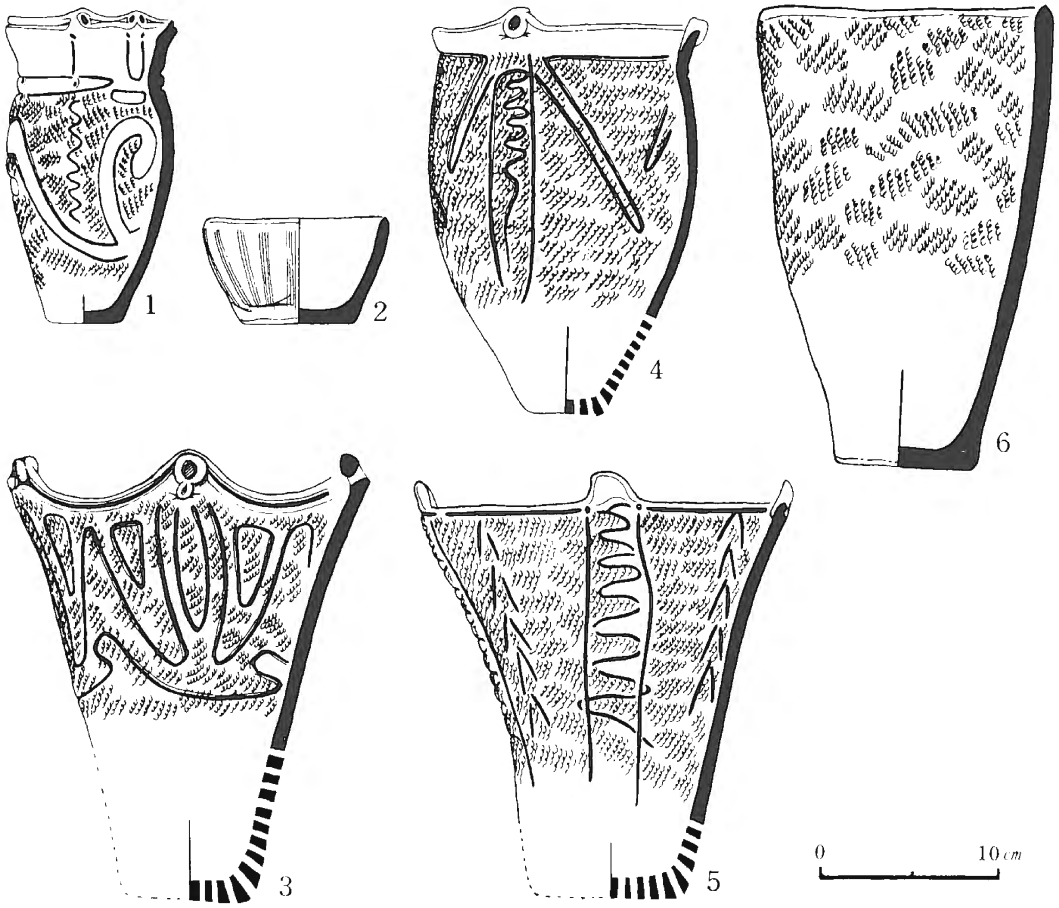
1（第5図1、第6図1）

高さ18.7cm、口径10.5cmの小型深鉢である。器形は胴中央部が膨らみ、頸部でくびれて口縁部が



第３図　茨城県陸平貝塚Ａ地点発見の土器実測図

第４図　茨城県陸平貝塚Ａ地点発見の土器(1)　(2)



第５図　茨城県陸平貝塚Ｂ地点発見の土器実測図

やや外反する堀之内Ｉ式に多い形態であるが、なにぶんにも高さ20cm未満という小型品であることが面白い。

本土器はＢ地点発見の土器中、一番の精製品である。器面は口唇部から底部に至るまで、内・外面とも間断なく器面調整や研磨されており、驚いたことに胴部に施されたすり消縄文の縄目の部分も研磨されている。このような例は堀之内Ⅱ式以後の精製土器に若干みられるが、堀之内Ｉ式では珍らしい。

土器の内面研磨はさらに念入りで、まず、底部の立上がり部分を巾約５㎜のヘラ状器具で横方向に研磨した後、底部から頸部までは先の細いヘラ状器具で縦方向に掻きあげ、口縁の内側部分ではさらに横方向に磨きをかけている。

土器の色調は内・外面とも黒色を呈し、全体が黒光りしているが外側の胴下半部から底部にかけて一帯は、その表面が薄く剥離し、その下から細砂や石英小粒を含む黄褐色の地肌が顔をのぞかせている。このような表面剥離の例は、加曽利ＢＩ式の良く研磨された浅鉢形土器にみることができる。一説によると、この剥離の原因は器形成形後、表面にまったく異質の化粧土を塗り込んだ結果とも言われている。この点については土器製作実験でも未だ解明されていないが、もし、これが事実だとすると、この手の土器の製作は他の土器と較べて、はるかに高度な技術と労力を要することとなり、当然、できあがった土器の用途は日常雑器類とは区別されるべきものとなろう。

２（第５図２、第６図２）

高さ6.2cm、口径10cmの小型椀形土器である。胎土中に細かい砂が多量に含まれている。

つくりは粗雑で、器面には文様らしきものはなく、全面にススキの茎のようなもので器面調整したと思われる整形痕がある。これは一本の巾が約

第６図　茨城県陸平貝塚Ｂ地点発見の土器（１～５）

7㎜ほどで、底部から口縁へ向って掻き上げたように無造作についているが、器体の一部分にだけ実測図にみるような、かなりはっきりした4本線からなる整形痕が等間隔に残されている。

この土器の造りは非常に粗く、土器の内・外面とも一応研磨されてはいるが、器形成形時に充分な器面調整が行われなかったとみえ、全面に凹凸が激しく輪積みの跡がはっきりとわかる。この輪積み痕は底部の立上がりから口縁部まで三段あり、その巾はいずれも約2cmである。つまり、一見手づくね風にみえるこの椀形土器は、粘土紐を三本、輪積みにしてつくられているのである。

3（第5図3、第6図3）

高さ22.5cm（推定）、口径20cm。口縁部が厚く、四個の大波状口縁を有する深鉢である。器形は底部から口縁部に向かって徐々に口の開く朝顔形を呈する。胴下半部は欠損している。

文様は胴部にRL単節縄文が地文となり、この上から巾広のヘラ描き沈線によって弧線文や幾何学線文が施されている。この沈線文群の下には、四箇所に波頭状の文様を描く一条の沈線が胴下半部をめぐっており、ちょうどこれが胴部上半の沈線文様を区切る形になっている。

本土器も、いわゆる精製土器の部類に入る。もちろん前述の小型深鉢に較べれば、造形技術や文様の表出法などの点ではるかに及ばないが、左右対称の器形や厚さの均等な器壁、そして口縁部をはじめとする各無文部分の念入りな研磨痕は他の土器にはみられない。とくに口唇部と土器の内面における研磨は丹念に行われ、一見しただけでは加曽利BⅠ式と見まちがえるほどである。胴下部欠損のため用途不明。

4（第5図4、第6図4）

高さ23cm（推定）、口径15cm。胴部下半欠損。口縁部三箇所に小突起のつく粗製の深鉢で、この手のものとしては小型である。

文様は口縁の突起下に懸垂文を中心とした縦方向の文様帯を配したもので、地文はRL単節縄文である。本土器は前述の2と同様に文様の施文法や造形技術が非常に稚拙である。とくに器形のゆがみがひどく、土器の表面は口縁部をはじめ器体各部に成形時の器面調整不良のための凹凸がみられる。器体の割れかたについても、粘土紐のつなぎ目部分から上・下に分割しているところが数箇所あり、内側から見るとこの部分は粘土紐同士の接着がうまくいっていない。

本土器の用途については、従来の常識からすれば粗製土器であるという点で煮沸用と言えようが、復製土器による実験では煮沸用土器こそ内側の整形・研磨が生命であるとの結果が出ており、はたしてこの土器が煮沸用具として使用に耐え得るかどうか疑問である。

5（第5図5）

高さ24cm（推定）口径21.5cmを計る中型の深鉢で、大型破片より復原してある。器壁の厚さは6㎜～7㎜で、ほぼ一定している。口縁部の4箇所に粘土をつまみあげたような突起があり、この直下にヘラ描き沈線による垂線が4cmほど離れて2本ひかれ、この中は流水文状の沈線によって埋められている。

この突起下文様帯の間には、ヘラ描きによる「八の字」状の文様が五段、縦方向につけられている。地文はRL単節縄文である。この土器の内側は良く研磨され光沢を持っているが、外側は充分な器面調整を行わずに文様を施文しており、胴部の凹凸の著しい部分では縄文が途切れてしまっている。本土器は3よりもつくりは雑であり、いわゆる半精製土器の部類に属するかと思われる。

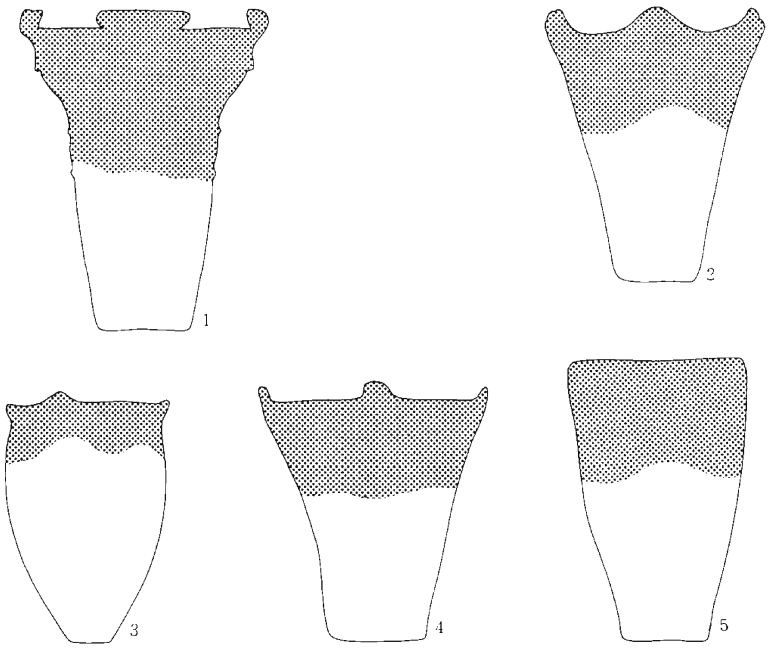
この土器には、内側のほぼ全面に煮沸時のこげつきと思われる炭化物の付着がみられる。これは、特に口辺部の付近に多い。また外側の器面の色調も、胴下半部と上半分ではA地点における1・2土器同様に異なっており、本土器が煮沸具に用いられたことはまちがいない。なお、胎土中には雲母小粒の混入がみられる。

6（第5図6、第6図5）

高さ26cm、口径17cmを計る筒形に近い粗製深鉢形土器である。器壁の厚さは6㎜～7㎜でほぼ一定している。地文の縄文は無節で、無造作に何度もつけ変えたらしく、その方向は横・斜・縦という具合に一定していない。胴下半部は底部から胴中央部に向って縦方向に研磨されており、茶褐色の光沢を有する。また、内側部分も底部から口辺部にかけて、縦または斜め方向に研磨され、黒光

第一表　陸平貝塚B地点発見の堀之内Ⅰ式土器にみる製作上の諸特徴

No.	形態	成形状況			研磨状況		胎土	評価
		器形	粘土輪づみ	整形	内面	外面		
1	壺形	左右対称 ゆがみなし	接着良好	内・外面良好 器厚均一	全面研磨 光沢あり	ほぼ全面研磨 無文部分光沢あり	砂＋石英粒を含む	精製土器（土器づくりの熟練者がつくった）
2	椀形	やや ゆがみあり	接着不良 輪積み痕あり	内・外面不良 凹凸あり	整形不良のまま研磨（口辺部のみ）	器具調整のみ 研磨せず	細砂を多量に含む	粗製土器（土器づくりの素人がつくった）
3	深鉢形	左右対称 ゆがみなし	接着良好	内・外面良好 器厚均一	全面研磨 光沢あり	口縁部のみ 研磨	砂＋石英小粒を含む	精製土器（つくり慣れた人がつくった）
4	深鉢形	左右非対称 ゆがみ大	接着不良 輪積み痕大	内・外面不良 凹凸大	整形不良のまま研磨 （光沢むら）	器具調整のみ 研磨せず	細砂を多量に含む	粗製土器（土器づくりの素人がつくった）
5	深鉢形	やや ゆがみあり	接着良好	内面良好 外面やや不良 器厚均一	全面研磨内面に炭化物付着 光沢なし	器具調整のみ 研磨せず	細砂＋雲母小粒を含む	半精製土器（つくり慣れた人がつくった）
6	深鉢形	やや ゆがみあり	接着良好 器厚均一	内面良好 外面やや不良 器厚均一	全面研磨 光沢あり	器具調整のみ 研磨せず	細砂＋雲母小粒を含む	粗製土器（つくり慣れた人がつくった）



第7図　煮たきに使用された痕跡のある土器

1　A地点出土（阿玉台式）　2～5　B地点出土（堀之内Ⅰ式）

（ドットの部分にススが付着している。）

りしている。

この土器は胎土中に多量の砂と雲母の微粒子が少量混入されており、5の胎土に近似している。またその他にも、器形のバランスや、均一な器壁の厚さ、内面研磨の具合など似かよった点が多い。本土器の用途については、5同様に器体外面の胴部下半が茶褐色、胴上半部が黒褐色という色調差をみることができ、煮沸用具としての可能性が強い。

む す び

以上陸平貝塚発見の土器について、その発見時の状況や土器個々の問題について所見を述べてきたが、最後にこれらについてその概略をまとめ、結びとしたい。

遺跡について

陸平貝塚は霞ケ浦を望む広大な丘陵台地の縁辺斜面部に点在する大・小7つの貝塚群によって構成される大貝塚で、その規模においては千葉県下の馬蹄形あるいは環状貝塚と呼ばれる大貝塚に匹敵する。しかし本貝塚における貝層の分布状況は馬蹄形や、環状を呈さず、台地の縁辺に沿って不定形に点在しており、しいて名を付すとすれば「台地縁辺貝塚」とも言うべきものである。しかも本貝塚では、貝層の主体部がほとんどの場合、斜面部に存在するという点で、千葉県下における大貝塚の貝層形成状況とは異なっている。筆者の知見によれば、千葉県下にも台地の縁辺部に貝層を有する大貝塚がないわけではないが、貝層の主体部はあくまでも台地上に存在している。

また、陸平貝塚では、過去数回にわたって発掘調査が行われているにもかかわらず、住居址の発見例は報告されていない。これは多分に過去の発掘調査が斜面貝層部にのみ限られていたことにも起因しており、調査区の設定いかんでは、今後、この周辺から住居址の発見される可能性は極めて強い。いずれにしても、本貝塚については未だに不明な部分が多く、縄文時代のかなり長期間にわたって、霞ケ浦南岸地域に君臨したと思われるこの巨大な集落遺跡の様相を更に明確にするためにも今後の大規模な調査が期待される。

遺物について

(1) A地点発見の土器

第3図1と2は発見時の出土層位によりその先後関係は明らかであるが、両者は形態・文様の点でも著しい相違がみられる。まず1の形態は、千葉県・木之内明神貝塚（註5）に代表されるような朝顔状の深鉢に近い。これに対して2の場合は加曽利E式に一般的なキャリバー形に近い深鉢である。文様についても、1は口辺部が断面三角形の紐線と結節沈線文、胴部は成形時の輪積み痕と粗いキザミ目で構成されているのに対し、2は断面の丸い紐線に沈線文を主体とし、器面調整した胴部には浅く掘り込んだキザミ目と連続圧痕を付した懸垂状の紐線文によって文様が構成されるなど、1の方が2よりも古い特徴を備えている。これらの編年的位置については、あまり類似例がなく明確には判定しがたいが、しいて比定すれば1・2とも金子浩昌氏の「布施貝塚」第Ⅲ群、A類2、角押文系土器（註6）に相当するといえよう。

(2) B地点発見の土器

第5図1～6は竪穴住居址の床面直上層中より一括して発見されている。これらの土器の形態は千葉県下の堀之内Ⅰ式期のものとほとんど変化はない。しかし、文様についてはかなり異なった要素がみられ、これらは他地域における土器型式の影響を強く受けていたことが充分に予想される。その特徴的なものは、1の渦巻状すり消縄文と3の波頭状沈線文および5の「ハの字文」である。このうち1と3の文様は明らかに大木10式の影響がみられ、磐城市・綱取貝塚出土のものにその類例を求めることが出来る。また5の「ハの字文」については、中部地方の曽利式の文様要素を引きついでいることは明白である。いずれにしてもこれらは縄文時代、中期末の特徴を受けついでおり、全体に堀之内Ⅰ式でも古手の時期に属するものと考えられる。

次に土器の製作上の問題についてみると、まず全体にそのつくりが小型であることに気がつく。今回発見の深鉢5例中、最大のもので器高は27cmであり、平均すると25cm前後でしかない。筆者の知る限りでは、千葉県下における堀之内Ⅰ式土器の主要形態規模は平均30cm前後であり、今回報告のものよりは、ひとまわり大きい。これは、一見たいした差でないような感じを受けるが、土器を容器として考えた場合、両者の容量には歴然たる

差を生ずる。

また、技術的な面からこれらの土器をみると、いわゆる精・粗の比率は、精製品2、半精製1、粗製3となる。精製土器のうち第3図1は、形態・文様・胎土、どれをとっても稀に見る優秀品であり、その作者はかなりの熟練者が想像できる。また、粗製土器のうち第3図2・4は、はたしてそれが使用に耐えうるかどうか疑問を生ずるほどの粗悪品であり、各所に器形成形時の初歩的なミスが目立つ。これはある程度つくり慣れた人が手を抜いて製作したのでなく、土器づくりに関してほとんど未経験な素人がつくったものである。3・5・6は土器づくりに慣れた人の作であるが、このうち、5・6はその胎土と器体のつくりが近似しているので、おそらく同一人物の作かと思われる。

つまり、B地点発見の土器群があくまで同時に作られたものと仮定すると、その製作者は少なくとも三人以上であり、しかもかなりの技量差を有する人々であったことが想像できるのである（第1表参照）。これは言いかえれば、当時の土器づくりが特定の集団の手によるものでないということを意味しよう。実をいうと、加曽利貝塚博物館の実験によれば、縄文時代の土器づくりは、イ)粘土採集時における粘土選別能力、ロ)素地土作成時における体力、ハ)土器製作時における技術などが必要不可欠の条件であることが判明しており、従来の考古学界で考えられていたような、不特定多数説を否定する方向にあったが、今回の試みは皮肉にも従来までの学界の説を肯定する結果となった。

今後、機会があれば同時期の土器群の観察を続けてゆきたいと考えている。

（千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員）

〔脚註〕

(1) I. Iizima, and C. Sasaki, "Okadaira Shell Mound at Hitachi", Tôkiô, 1882.

(2) 酒詰仲男「茨城県陸平貝塚」『日本考古学年報Ⅰ』誠文堂新光社　昭和26年

(3) 土器製作時に太さの異なる粘土紐を不用意に積み上げて成形すると、器壁の厚さは不均等になりやすい。加曽利貝塚博物館の土器製作実験によれば、このような器厚の不均等は乾燥時において器体各部の均等な収縮を妨げ、結果的に器体のゆがみや、ひび割れの原因になることが判明している。

(4) 煮沸時に薪の量を多くして土器を覆いかくす程に積み上げた場合には、このような現象は起らない。そのかわり、火力が強すぎて土器の内容物がふきこぼれるなどの不都合が生ずる。したがって内容物を減らさずに煮あげるためには火力をおさえ、時間をかけて煮沸しなければならない。そのためには薪の量を少なくし、できれば片側から火を当てるようにすると良い。このような方法で煮沸すれば、ハマグリなどの貝類は30分足らずで煮ることができ、その結果、土器の外面には前述のごとき痕跡が残る。

(5) 西村正衛「千葉県小見川町木之内明神貝塚」—東部関東における縄文中・後期文化の研究、その一、—『学術研究』18号　早稲田大学教育学部、昭和44年

(6) 金子浩昌「布施貝塚」『印旛手賀』早稲田大学考古学研究室報告第8冊　昭和36年